

ごあいさつ

株式会社カイト代表取締役社長 大森みつえ

本日は、年度末のお忙しい中にもかかわらず、弊社代表取締役会長・土屋達彦の「お別れの会」にお集まりいただき、誠にありがとうございます。います。

本年、一月二十三日、午後九時五十分、土屋はがん研有明病院にて胆管ガンのため亡くなりました。七十二歳でした。

ガンが発見されたのは今から四年七カ月前のことですが、そのときにはすでにステージ四の状態で、ただちに手術が行われました。

その後、長い闘病生活に入ったわけですが、その間、抗がん剤治療を受けながらも、体調の良いときには会社に顔を出し、私たち社員を叱咤激励したり、広報コンサルティング業務をこなしたり、また時には地方講演にも出かけておりました。

しかしながら、何度も入退院を繰り返す中で、体力が少しずつ弱っていったのも事実です。

そのような状況のなかで、最後の気力を振り絞って書き上げましたが、昨年十一月に出版されました『叛乱の時代』です。

ジャーナリストとしての集大成とも言えるべきこの本の完成を見届け、安心してように土屋は天国へと旅立っていきました。

さて、私ども株式会社カイトは、昭和五十九年三月に土屋が設立し、今月でちょうど三十年目を迎えました。その間、土屋が築いてまいりました大学時代、また産経新聞社時代の人脈をはじめ、多くのクライ

アントの皆さまに支えられて、今日までやってこることができました。本当にありがとうございます。

その間、土屋がいつも私たちに説いておりましたのは、「社員全員がプロデューサー」であり、「おやつ？」「まあ！」「へえー」の精神でした。

つまり「おやつ？」と人々の関心を引き寄せ、「まあ！」と驚かせ、そして最後に「へえー」と納得させる。これがプロデューサーの仕事であり、カイトならではの仕事の流儀だと繰り返し申ししておりました。

発想のユニークさにおいて、その右に出るものがないという土屋に引っ張られながら、私たちは今日まで様々な仕事をしてまいりました。

正直なところ、時には奇想天外ともいえる発想もあり、「本当にこれが実現できるのだろうか？」と社員一同、半信半疑だったこともありました。

しかし、何とか実現してしまうのが、土屋マジックであり、カイト流の仕事の仕方でもありました。

そんな土屋は、人との出会いを心から楽しんでおりました。自由闊達に意見を言い合う場を好み、そして何よりも愉快にお酒をくみ交わすことが大好きでした。

本日の会場、この外国特派員協会はそんな土屋の大のお気に入りでもありました。

また、本日の「お別れの会」を「流れ献花」という形にさせていただきましたのも、自由な雰囲気の中、皆さまに土屋の思い出話に花を咲かせていただければ、これ以上の供養はない、と考えたからでございます。

くしくも会社設立三十周年という節目の年に、土屋はこの世を去りました。

それはあたかも「後は任せたからみんなで思い切りやってみろ！」と私たちを叱咤激励する、土屋の親心のような気がいたします。

本日ももちましてカイトは新たな時代へと入ります。

カイトの総合プロデューサーでありました土屋が、あの世から見守る中、私たちは「社員全員がプロデューサー」を目指して、より一層邁進してまいります。

これまで、故人ならびに株式会社カイトに長年賜りました皆さまのご厚情に感謝いたしますとともに、新生カイトに對しましても引き続き、皆さまのご支援・ご鞭撻のほどをお願い申し上げます、私の挨拶とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。